

## 「삼풍백화점」 정이현 (鄭梨賢)

2016. 11. 19 柳本圭子

### □ 作家について

1972年ソウル生まれ。韓日文化交流会議委員。2002年「ロマンチックな愛と社会」で「文学と社会」新人文学賞を受賞し、作家活動を始める。2004年『他人の孤独』でイ・ヒョソク文学賞、2006年「三豊百貨店」で現代文学賞、今日の若い作家賞などを受賞。2006年朝鮮日報に連載した長編『マイスイートソウル』は日本でも翻訳刊行された。その他著書に『今日のウソ』、『あなたは知らない』、『アンニョン、わたしのすべてのもの』、イギリスの作家アーリング・デュ・ボトンとの共著『愛の基礎：恋人たち』など。新聞各紙でコラムを連載するなど、幅広く活躍している。(『すばる』2014年4月号より)

### □ 三豊百貨店について

1989年12月にソウル市瑞草区にオープンした地上5階、地下4階の超現代的な建物  
1995年6月29日午後5時55分崩壊(死者・行方不明者501名、負傷者938名)

### □ 主な登場人物

私・・・33歳の女性。

R・・・Z女子高校の同級生。三豊百貨店2階の婦人服Qブランド売り場で働く。

両親・・・経済力があり教育熱心。娘を甘やかす気味。

### □ あらすじ

比較的裕福な環境で育った私。幼稚園では遅刻の常習犯で平気で嘘もつくが、両親はあまり気にもとめない。文学的才能はあったが、数字には弱い子だった。

<5:03 p.m. 百貨店の玄関に入ると、エアコンの故障を告げられる>

大学時代に学校より語学学校に熱心に通っていた私は就職先がなかなか決まらない。

<Q売り場をのぞくがRの姿は見えない>

大学卒業の直前、三豊百貨店で偶然Rと再会、ポケベルの番号を教え合う。

卒業後、お見合いも断り図書館で時間を過ごしていた私は、ある日三豊百貨店に行く。Rに連絡して一緒に食事をし彼女の家に遊びに行く。

<日記帳を買った地下1階で、店員たちが5階の天井の異常について話すのを耳にする>

以来二人は急速に仲良くなりRの職場や家で一緒に過ごすようになるが、私はRがくれた彼女の家の鍵を負担に感じる。

<1階の公衆電話からRのポケベルにメッセージを送る>

ある土曜日、R が働く売り場でアルバイトをした私はミスをし、R が必死でかばってくれる。その後 R とは連絡を取り合わず、やがて私は就職、恋人もできる。

＜私が自宅に戻ってまもない午後 5 時 55 分に三豊百貨店の建物が崩壊＞

事故後、私は三豊百貨店の批判を載せた新聞社に抗議の電話をかける。恋人とは別れ、会社も無断欠勤し解雇される。事故から 10 年、R の消息は依然としてわからない。遠くに引っ越した私は、百貨店があった場所の前を通ると今でも時折胸が痛む。

□ 作家のコメント

当時、ニュースや新聞では、どのようにして、またなぜ、三豊デパートが崩壊したのかということが記事になっていました。しかし、文学をしている人間としては、当時の三豊デパートの中に人々が生きていたこと、またその人たちにも友達がいて、彼らを懐かしんでいる、彼らに対する思い出を持っている人がいるということ、そして、残った人としての罪の意識を持っているのではないかということに気づきました。これはまさに社会と文学の関係であり、私は文学をする人間として描く必要があるのではないかと思い、書いたものです。

追悼の思いが込められた小説であるとおっしゃっていただきましたけれども、私も全くそのとおりだと思います。しかし、私はその追悼という言葉、R という名前がつけられた友達個人ではなく、名前がつけられることさえなかった多くの人々に対する追悼にしたいのです。ただこの三豊デパートの崩落事件の犠牲者だけでなく、三・一一の東日本大震災で犠牲になった方々をはじめ、私たちが理解することができない不可抗力による運命から逃れることができなかった人々、つまり人々に記憶されることすらなかった人々、またそういった「日」、そういった「こと」に対する追悼であると。R は、あくまでもその象徴的な存在に過ぎません。

(集英社刊『すばる』2014 年 4 月号掲載の鼎談より抜粋)

□ 翻訳練習

①＜P.61 下から 4 行目～P.62 下から 9 行目＞

②＜P.66 上から 7 行目～最後＞